ルビぃなヤツら

まり。

「ちょっと、ルビカン、きいてよぅ」

馴れ馴れしい口調、まあ、いつものことだ。俺は、いつものコーヒーマシンの前でゆっくりとコーヒーをカップに入れ、持って席に戻りながら、相手に向かって挨拶した。

「よう、今日はどうした」

席について、机の前の札を「仕事開始」の合図で出す。札には

「ルビ管理者」

俺の肩書き、仕事内容を記載したものだ。ルビを管理するので、ルビカンリ、愛称のような呼ばれ方として「ルビカン」と呼ばれている。どのような仕事かというと、文字に対して、ルビたちを引き合わせしているのだ。ないしは、文字からの依頼をもらって、ルビたちにコンビ・グループを組ませてから引き合わせる。ルビたちのユニットを企画して売り込むような、まあ、芸能事務所のマネージャーのような仕事だ。

「僕たち、ルビカンからユニットにしてもらってさぁ。確かに、文字様に引き取られて活動しているけどぉ」

俺に声をかけてきたリーダー格、「じ」が話し始めた。彼らは「じゅう」というユニットだ。先日、俺は、彼らを「銃」に引き合わせた。「銃」からはメディアで良く引き合いに出されて、人気者という位置にあった。ルビたちも、露出が多い文字様に付くのは、自慢できることだったので、俺は、「いい仕事をした」はずだった。元々、彼らは、「十」のルビだったが、

「もう、ルビなんて要らないよ」

と、契約終了。確かに「十」は、小学校ですぐに習う漢字で、外国人も数字は読めないと困るとから習得率が高く、ルビ不要の漢字になっていた。フリーになった「じゅう」に、新たに「銃」を引き合わせたのだった。

「新聞にもよく載るし、テレビでニュースにも出るし、割と働かせてもらっているけど。読む人がね、イヤそうな目で僕たちを見るんだよぅ」

「じ」が続けた。「じ」の後ろに隠れて、「ゅ」がこちらを見ている。存在感の無いヤツだ。

「う」は、「じ」の好きにさせて、のんびりと微笑んでいる。

「『ほんとにイヤよねえ』って言うんだよぅ。『銃』のほうも、『ふん、オレにモンクつけるヤツは撃ってやる』って言うしぃ」

コーヒーを飲みながら、やれやれ、と俺はため息をついた。もちろん、「銃」は単なる語（単語）だから、『モンク言っているヤツを撃つ』など出来ないが、ルビたちが、一緒に仕事が出来ないなら、他とのチェンジを考えないとならない。

「他の『じゅう』の漢字は、引き合いが無いなあ。おまえたち自身も、『変化』できたら、

別の漢字も探せるのだが」
俺の提案に、「じ」が少し考えて、
「僕の、アタマの、これを外したらどうかなぁ」
斜めに帽子を被るようにつけていた二つの点を、「じ」が取り外すと、「し」だ。彼らユニットは「しゅう」になった。
「おお、『しゅう』ならあるかもしれない」
俺は机の上に開いていたパソコンの依頼データで、「しゅう」を検索した。
「あった。常用漢字グループではない漢字だから、ルビが必要らしいぞ」
俺が「しゅう」たちに、引き合わせたのが「臭」だ。新しい依頼者がコワくない相手とわかって契約成立。「しゅう」たちは楽しそうに出て行った。やれやれ。俺は、他のルビたちの引き合せをするため、パソコンに向かおうとしたところ、
「ああ、『臭』って、クサくってイヤだぁ」
元の「じゅう」になって戻ってきてしまった。
「手のかかるユニットだな。『銃』に再交渉するか。それとも、他に変化できるか」
多分、「銃」との再契約は難しい。ルビ側から離れると、漢字側もプライドを傷つけられている。「じゅう」は、「銃」にも「臭」にも、拒否されるだろう。
「困ったなあ。漢字に付けないルビのユニットは、一旦解散、バラバラにして、次の漢字の依頼で、新しい組み合わせになるまで、ルビ倉庫に戻すことになるぞ」
困った顔で「じ」が、「ゅ」や「う」を見やった。「う」はゆっくりと、
「おいらは、自分を変えられないけど、君たちと一緒に居たいなあ」
「じ」の背後で「ゅ」は、黙ってうつむいていた。「ゅ」は、今までも何も言ってこない。何を考えているのだ。やはり、「じゅう」は解散かな。

・・・・・・・

僕、「ゅ」は、「っ」や「ょ」などと一緒の小さいルビ、チビ・ルビだ。漢字の文字様に対して直接やりとりするのは通常サイズのルビたちだ。僕たちは出来ない。チビ・ルビは単独で発音出来ない。だから「じ」と「う」に手を繋がれて、一緒に発言する。僕は彼らに挟んでもらって、日々を過ごせている。それも、まあ、いいか。
漢字の文字様が、本や、新聞、テレビ、映画、ポスター、ウェブサイト、色々な場所に引っ張り出されるたびに、一緒に出て行くけれど、僕が何かしなくても仕事は片付いていった。そういうものさ。黙って、「じ」の後ろにくっついていればいいのさ。
ルビカンが、時々、僕を見て、
「おまえも、何か意見が無いか」
そう言われても、僕だけでは何も出来ない。僕から意見は言えないね。
確かに「銃」様は、僕もコワかった。「じ」が頑張って「銃」様に仕えようとしていたけ

れど。僕たちを読むと人々が、悲しんだり、嘆いたりした。ため息や、怒りのような声が漏れたりすると、僕たちも、悲しくなってしまう。

「あー、おいらたちも悲しくなってしまうねえ」

のんきな「う」がつぶやいてしまった。「銃」様がすかさず、

「なんだ。おまえらに、そんなこと言われる筋合いはないぞ。黙ってオレに付いていろ」

大きな声で威嚇するものだから、「じ」も「う」もうろたえてしまった。僕は何も言えず、ビビってしまって「じ」の陰に隠れていたけど。

「ルビカンに相談して、チェンジしてもらおぅ」

行動してくれるのは「じ」だ。「じ」は、自分の帽子を取って「し」になって、ルビカンと交渉してくれていた。僕は一緒に連れて行かれて見ていただけだ。

「臭」に会って、真っ先に、

「ちょっとくさいなあ」

でも、言わないで我慢していた。今度はマイペースな「う」が、つぶやいた。

「ちょっと、におうよねえ。これからずっと、我慢しなくちゃならないのかなあ」

また、「じ」がルビカンに交渉しに行った。もちろん、僕も「う」も一緒に連れて行かれたけどね。でも、今度はルビカンから、一緒になれる文字様が現れない場合は、ルビのユニットは解散するしかないと、言い渡されてしまった。

「おいら、君たちと別れるのはイヤだなあ」

いいなあ、「う」は。自分の気持ちをきちんと言えて。何も出来ない僕の意見など、言っても仕方ない、言うことも出来ないよ。

「ねえ、『ゅ』は、どうなの。僕たち、本当に解散になってしまうよぅ」

いつも背中に隠れていてもそのままにしてくれていたのに、「じ」が、いきなり背中から僕を振り払って、「じ」の前に立たせた。

「ずっと何も言わないままだけど、『ゅ』もルビだよぅ。文字様に付けないと、僕たち、ずっと、ルビ倉庫に入れられて、何も出来なくなってしまうよぅ」

僕なんかが、何か意見を言ってもいいのだろうか。今まで何もしないで、ただ挟まれていただけの僕なのに。しかし、僕はどうしたら、よいのだろう。僕には、何も出来ない。僕は、そのまま黙っていた。

「ねえ、皆で考えないとダメだよぅ。『ゅ』も何か言おうよぅ」

「じ」自身も、どうしたらよいかわからないから、僕に言ってきているのかもしれない。そう言われても、僕なんか何も出来ないよ。

「おいらたちのユニットで、何か変化できるようなこと、無いのかなあ」

困っている中でも、ゆっくりとした話し方で、「う」が考えながら言った。

「『ゅ』もねえ。小さく縮こまっているから、声が出ないのかもしれないねえ。ためしに、『ゅ』も、思い切り声をだしてみたらどうかなあ」

ゆっくりとした話し方で、「う」が僕に声をかけてきた。「じ」が何も考えられなくなって

困っている中で、僕にも何か言わせようと思ったのだろう。こう続けてきた。
「あのねえ。『ゅ』みたいなチビ・ルビは…バラバラにされちゃうと、小さいから見つけにくくって、ずっと倉庫に居ることになってしまうんじゃないかなあ」
え、そうなのか。僕は驚いた。思ってもみなかった。確かに、声も出せずにいる僕を、倉庫から見つけて、組み合わせてもらえるのか。僕はコワくなってきた。今のユニットが解散になったら、僕は、一生倉庫かもしれない。さすがに、それはイヤだ。
イヤだ。イヤだ、倉庫に行きたくない。どうしたらいい。僕は、恐怖と不安が大きくなってきた。それが、僕のカラダの中で、どんどん、大きなエネルギーのような強いチカラを持って、お腹から、チカラがグワっとあがってきて、
「そんなの、イヤだぁぁぁ」
気がついたら、僕自身が大きな声で叫んでいた。え、僕はこんな声が出せるのか。
「わあ、びっくりしたよぅ。いきなり叫ぶからぁ」
僕の前にいた「じ」が非常に驚いた様子で、僕を見ていた。
「すごいよぅ。声、出せるんだぁ。それだよぅ」
言いながら、「じ」の顔に笑顔が戻ってきた。
横から嬉しそうな顔でのぞき込んできた「う」が、
「なんだか、変わったような気がするなあ」
言われた僕自身、カラダに何か変化を感じていた。

・・・・・・・

「おや、また『変化』してきたな。頑張ったみたいだな。今度は……多分、良い組み合わせが出来るぞ」
また「じゅう」が戻ってきたと思ったのだが、俺の前に現れた彼らは、「じゆう」になっていた。あのチビ・ルビが、頑張って変化したようだ。
「ほら、きっと気に入るだろう」
俺は、彼らに新しい文字様を紹介してやった。今度は、彼らも、きっと楽しい素晴らしい景色が見えるだろうよ。

かれらは、嬉しそうな顔で、「自由」と一緒に、ルビカン部屋を出て行った。